島根大学医学部紀要，第39巻，39～44頁，2017年3月

実 践 報 告

# ４年次科目「卒業研究」に対する３年次科目「看護研究方法論」の問題点と課題

（看護学生／研究方法論／卒業研究／授業評価）

津本優子[1)]・玉田明子[2)]・宮本まゆみ[1)]・小林裕太[1)]

# Evaluation of Learning in “Method of Nursing Research” in the Third Grade to “Nursing Research” in the Fourth Grade

（nursing student / method of nursing research / nursing research / class evaluation by students）

Yuko TSUMOTO, Akiko TAMADA, Mayumi MIYAMOTO, Yuta KOBAYASHI

【要旨】看護学生が研究手法を学ぶ３年次の「看護研究方法論」について、４年次の卒業研究との繋がりの視点による授業評価から問題点を明らかにすることを目的に、A 看護系大学３・４年生計124名に質問紙調査を行った。研究プロセスに沿った授業内容の理解度や卒業研究への役立ち度、教授方法や教材の適切性を４段階評価で尋ねた。３年生24名（回収率38.7％）、４年生19名（同30.6％）の分析の結果、統計結果の読み取りや論文作成の３年生の理解度が最も低く、「卒業研究は先だと思って熱心に取り組めなかった」等の記述からも３年次は卒業研究への動機付けが不十分で理解が進みにくいことが明らかになった。また４年次の役立ち度の結果や自由記述から、量的研究の演習を中心に行ったため質的研究の演習が不足していることも明らかになった。以上より３年次に卒業研究に対する動機付けをどう行うか、また質的研究の方法演習を組み込むか否かが、今後の検討課題である。

## Ⅰ．はじめに

看護学教育において、1967年のカリキュラム改正により研究的態度を身につけることの重要性が力説されて、学部教育課程の中に看護研究が取り入れられるようになった[1)]。具体的には卒業研究として、研究計画を立てるまでを実施するところや、グループ研究を行うところ、そして一人で発表まで行うところなど、様々な方法で学生に研究過程を踏ませている[2,3)]。A 看護系大学の卒業研究では、学生が自分の研究テーマについて研究の全プロセスを踏み、文献検討から学会発表に準じた口頭発表および3,500字程度の論文作成まで行っている。そしてこの卒業研究を行うための研究の方法論を、３年生の前期に「看護研究方法論」という科目で学んでいる。本科目は講義に加えて架空のテーマとデータを使用し、計画書立案から論文作成までの一連の研究過程が経験できるように組み立てているが、本科目で学んだことは４年次の卒業研究を進めるための基礎となり得ているのか、学んだことは実際の研究活動にどのように繋がっているのか、などの評価はなされていない。

学生の研究活動に関する先行研究は少なく、その基礎的な知識・技術を学ぶ科目の教授方法に関する報告はみられない。そこで、A 看護系大学における看護研究方法論と卒業研究とのつながりから研究手法を学ぶ本科目の課題を明らかにし、今後の教育的示唆を得ることとした。

## Ⅱ．目　　的

学生による「看護研究方法論」の授業評価から、科目の課題を明らかにする。

[1)] 島根大学医学部基礎看護学講座
Department of Fundamental Nursing, Shimane University Faculty of Medicine
[2)] 島根大学医学部臨床看護学講座
Department of Clinical Nursing, Shimane University Faculty of Medicine

## Ⅲ．看護研究方法論の内容

以下のような研究のプロセスに沿った内容について、主に演習を中心とし、その演習前に必要な講義が入るよう15回の授業を組み立てている。

１．研究に関する基礎知識

１）講義：看護研究の意義、看護研究のデザイン・方法、量的データと質的データ

２．文献検討

１）講義：文献検索と文献検討

２）文献検索演習：医中誌 Web を中心に各自で準備したキーワードで文献検索を行い、文献リストを提出する。

３）文献クリティーク演習：小グループに分かれ、学生が興味を持った分野の量的研究および質的研究を１編ずつ読む。

３．研究計画

１）講義：研究計画の立て方

２）研究計画立案演習：研究動機および背景までが提示された４テーマから１つを選択し、独自の計画を立案する。

４．統計解析

１）統計演習：デモデータを用いて統計解析ソフト SPSS の使用方法について学ぶ。

２）データ解析演習：テーマ別のサンプルデータを使用し、提示された分析計画に沿って統計解析を行う。

５．論文作成

１）論文作成演習：統計解析の結果の読み取りと考察を行い、論文形式のレポートを作成する。

## Ⅳ．研究方法

１．対　　象

A 看護系大学看護学科３年生および４年生、計124名

２．研究期間

2015年７月～2016年３月

３．データ収集方法

３年生には「看護研究方法論」の最終講義の終了時に、４年生には「卒業研究発表会」の終了時に、研究についての説明および質問紙配布を実施した。質問紙は、事務室のレポート回収 BOX に提出してもらい、回収期間を１週間ほど設けた。

４．調査内容

１）教授内容の評価：３年生には、研究のプロセスに沿った12項目の内容の理解度について「ほとんど理解できなかった」から「概ね理解できた」の４件法で尋ねた。４年生には、３年生の項目内容のうち、文献クリティークについてのみ、量的研究と質的研究に分け、計13項目の科目内容の役立ち度について「ほとんど役に立たなかった」から「概ね役に立った」の４件法で尋ねた。

２）教授方法の評価：９項目の演習方法や教材について、「適切でなかった」から「適切だった」の４件法で尋ねた。両学年とも同じ項目および同じ問いかけとした。

３）自由記述：３年生は、卒業研究や本科目に対する自由な意見を、４年生には卒業研究を終えた現在、振り返って本科目に望むことなどを尋ねた。

５．データ分析方法

内容の理解度と役立ち度、および演習方法や教材の適切性について、評価別の割合を算出した。自由記載欄については、４件法の評価が肯定的か否定的かの２群に分けて意見数を算出、内容を抽出した。分析には IBM SPSS Statistics21を用いた。

## Ⅴ．倫理的配慮

１．島根大学医学部看護研究倫理審査委員会の承認（第252号）を得て実施した。

２．質問紙の提出の有無は成績評価とは関係が無いことを説明したうえで、教員がいない場所で回収を行い、教員の強制力が働かないようにした。

３．質問紙は、鍵付き保管庫で保管し研究終了時に破棄する。

４．本研究の目的、方法、研究への参加は自由意思であり、参加の諾意による不利益はないこと、調査は無記名であり個人は特定されないこと、結果を学会・論文で発表すること、回答をもって同意が得られたとみなすこと等を記した依頼文書を配布し、口頭でも説明を行った。

## Ⅵ．結　　果

３年生および４年生それぞれ62名に調査用紙を配布

し、回収は３年生24名（回収率38.7%）、４年生19名（回収率30.6%）であった。

１．教授内容の評価（図１）

３年生で理解できた割合が多かったのは、文献検索の講義と演習であり、「少し」と「概ね」を合わせて80%以上であった。一方、理解できた割合が少なかったのは、実際にデータを扱い始めてからの「結果の読み取りと考察」「論文作成」であり、「少し」と「概ね」

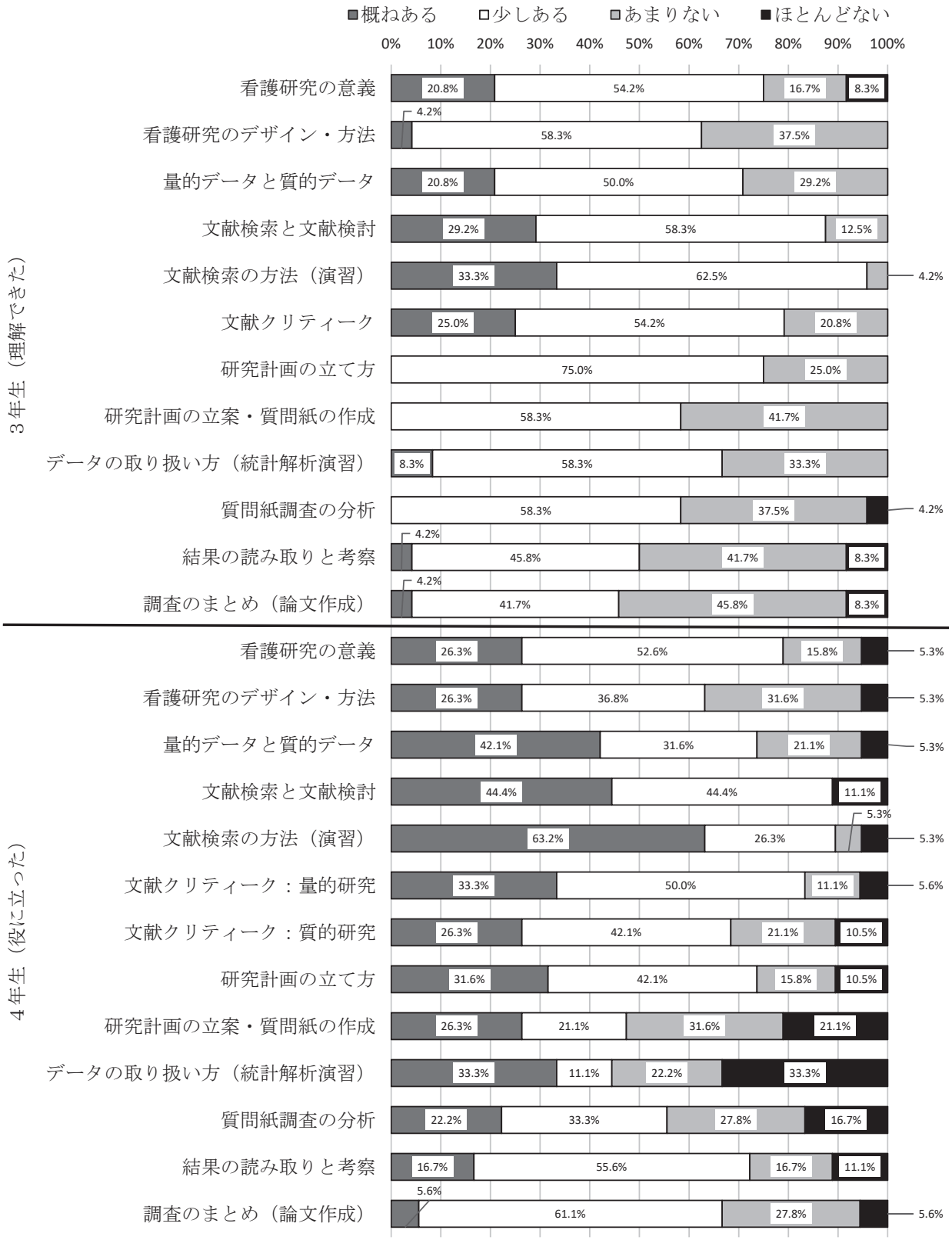


図１　教授内容の理解度（３年生）および卒研への役立ち度（４年生）

を合わせて50％以下であった。理解できなかった理由として、「難しかった（研究の意義）」「間違いがあるかもと思って見ることが難しい（クリティーク）」など、計４件の自由記述があった。

４年生で卒業研究に役立っている割合が多かったのは文献検索の講義と演習であり、「少し」「概ね」を合わせて80％を超えていた。一方役立っている割合が少なかったのは、研究計画の立案と統計解析演習であり、「少し」「概ね」を合わせて50％以下であった。役に立った理由として、「この視点がないと研究の意味がない（研究の意義、デザインと方法）」「研究の意義を見つけるには必要（クリティーク）」「スムーズに検索できた、やり方が分かっていたので役に立った（文献検索）」「一度やっていたのですぐ思い出せた、演習で習ったことやメモがとても役に立った（データ解析演習）」「分析の仕方が具体的に分かった（選択テーマ分析）」など、計42件の記述があった。一方役に立たなかった理由として、「覚えていないから（いずれの項目も）」「自分の研究では使用しなかったから（クリティーク、質問紙作成、統計解析演習、選択テーマ分析）」など、計25件の記述があった。

２．教授方法の評価（図２）

演習方法や教材の適切性について、両学年ともほぼ「適切だった」「まあ適切だった」が占めていた。「適切だった」割合が多かった項目は、３年生では文献クリティーク（37.5％）や文献検索の方法（45.8％）であり、４年生では同じく文献検索の方法（68.4％）の他に、統計解析の方法（52.6％）と教材（44.4％）であった。適切でなかった項目は、３年生では全項目で「あまり適切でなかった」が4.2％～8.3％あり、４年生では文献クリティークの方法（15.8％）、計画立案方法、論文作成方法および論文作成教材（いずれも5.3％）であった。

適切だった理由の記述として、３年生では「少人数で分かりやすかった（クリティーク）」「必要（統計解析の方法）」「分かりやすい（統計解析教材）」「分かりやすいよう誘導があった（選択テーマ計画立案教材）」など、計４件が挙がった。一方適切でなかった理由と

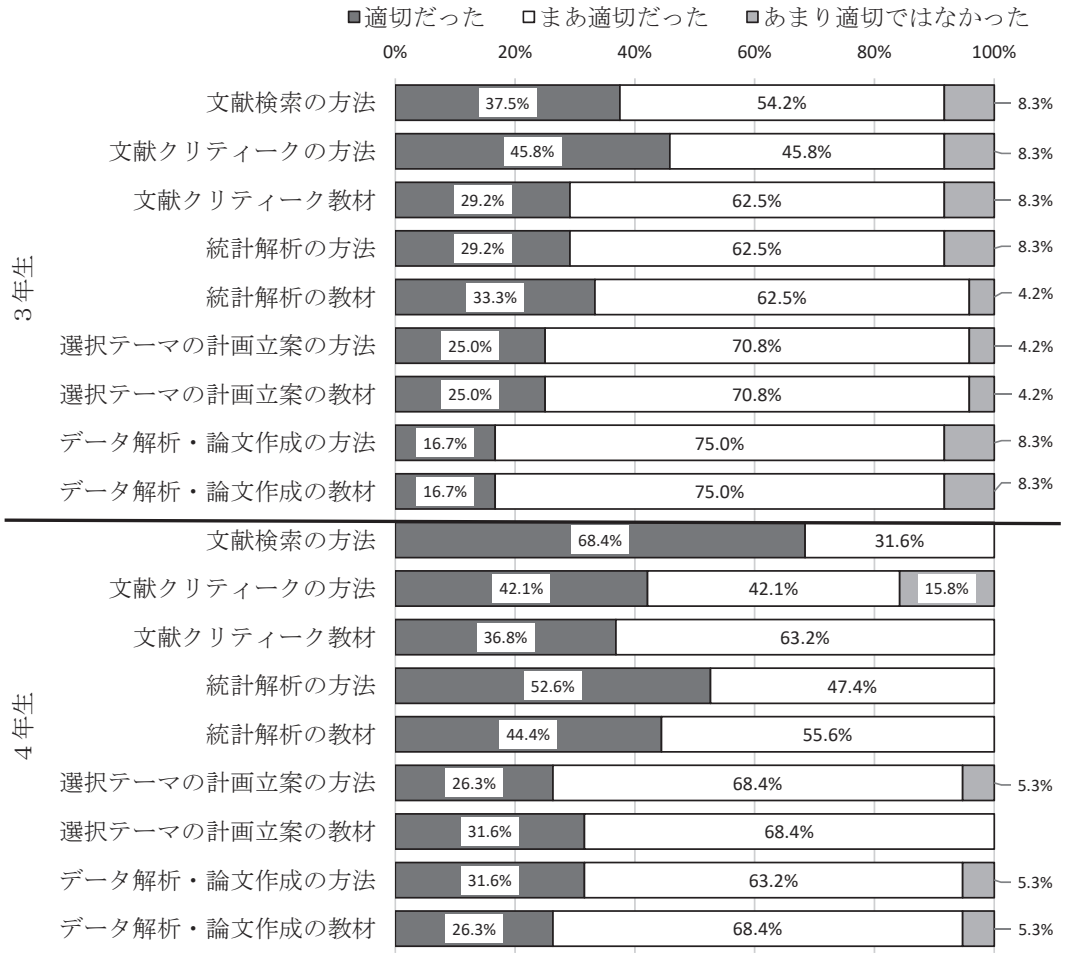


図２　教授方法の適切性

して、「突然でよく分からなかった（文献検索の方法）」「教員によって言うことが違う（選択テーマ計画立案）」など計３件が挙がった。

４年生が適切だった理由として挙げたのは、「クリティークの視点が分かりやすかった、チェック表があって分かりやすかった（クリティーク）」「教員がしっかりみてくれたので良かった（統計演習）」「具体例を用いて分析してみると理解しやすかった、わかりやすい例だった（統計解析教材）」「研究の流れがなんとなく分かった、研究への漠然としたイメージができた（論文作成）」など、計25件であった。一方適切でなかった理由として挙げたのは、「卒研との関連が分からなかった（クリティーク）」「記憶に残っていない（選択テーマ計画立案，論文作成方法）」の３件であった。

３．その他の自由記述

３年生では、翌年の卒業研究に取り組めそうかどうかの理由として、「すぐ忘れそう」「危機を感じた」「難しい」「不安」など否定的な意見が６件挙げられた。取り組めそうとした意見では「教員の協力を得ながらならできるかもしれない」の１件が挙がった。

４年生では、科目への追加･改善希望が12件あり、「卒業研究は先だと思って熱心に取り組めなかった」「３年次から卒研の進め方や研究分野を配布してもらえていたら、実習中から課題意識を持って取り組める」などの卒業研究への意識付けを希望するものや、「統計解析はテストや復習の機会があるとよい」などの統計処理の理解を深めるための方策を希望するもの、「考察時の文献の使い方」や「インタビューガイドの作成」について詳しく知りたかったなど、実際に卒業研究を進めていく上で自分が直面した困難についての解決を求めるものなどが挙がった。また「卒研前の練習ができて良かった」などの科目の肯定的な評価が２件挙がった。

## Ⅶ．考　　察

１．卒業研究へのつながりとしての本科目の評価

３年生の理解度評価では、結果の解釈から文章化の論文作成過程を除くと概ね理解できていた。論文作成については、自分の疑問から発したテーマではないものに取り組むことから、研究目的をどう明らかにし、どのように説明したら良いかを理解するのが難しかったのではないかと考えられる。４年生では、文献検索の方法の評価が高く、研究計画の立案・質問紙の作成および統計解析演習の評価が低かった。文献検索は、研究方法によらず全員が行うプロセスであり、３年次の経験が活かされた実感による評価と思われる。一方、質問紙の作成や統計解析は、評価が高い学生の「やっていたので思い出せた」や、逆に評価が低い学生の「使用しなかったから」という理由にもあるように、自分が行った研究方法によって評価が分かれたと考えられる。

以上のことから、３年生は、まだ自分の課題として捉えていない段階であるため卒業研究へのつながりを評価するのは難しいが、４年次で量的研究を行った学生にとっては、十分な予行演習になっていると思われる。

教授方法については、両学年とも概ねよい評価であった。演習では７名程度に教員１名を配置して丁寧に対応していることや、具体的な教材を用いて実際にプロセスをたどることを評価する記述もみられた。４年生の自由記述をみると、３年次に行ったことと卒業研究とのつながりが理解できた学生は良い評価を、そうでない学生は評価が良くない傾向がみられた。卒業研究と繋がっていない学生の中には、内容の理解が難しくて繋がらなかった学生と、卒業研究では質的研究を行ったため繋がらなかった学生がいると思われる。

２．看護研究方法論演習の今後の課題

調査の結果から本科目の問題点として、１）３年次の科目履修時においてはまだ卒業研究の動機付けが不十分である、２）教授内容について、質的研究においては内容的に、量的研究については統計解析の理解が不十分であるという問題点が明らかになった。それぞれについて今後の課題について述べる。

１）動機付けに関する学生の傾向として、基礎科目の知識や技術の重要性について、実習の場で改めて実感するという現状があり、卒業研究が始まって初めてその方法論の重要性を実感するのは同様のことと思われる。よって実際に取り組んだ際、「このことは１回やっている」と思い出せる引き出しを作ることが重要と考える。そのため、配布資料は４年次に見直して活用できるようなものを作成し、実際に行ったプロセスの成果物は学生に返却することも必要である。さらに、要望としてあげられていた、卒業研究の流れや研究分野の紹介を配布し、実習中に問題意識を育てるような働きかけも有効であると考える。

２）15コマの演習時間に、質的研究の内容についてどこまで盛り込むかについては検討が必要であるが、過去の卒業研究の動向から[4,5]、半数近くの学生が質的研究を行っているという現状もあり、集中講義などで補うなどの方法を考える必要があると思われる。また量

的研究における統計解析については、科目内のみで理解を深めるのは時間的にも難しいと考える。本科目以外にも、講義中心の「統計入門」や「疫学・衛生統計」、および統計ソフトを用いて解析演習を行う「情報科学演習」などの科目もあるため、それぞれの科目を通して学生自身が学びを積み重ねていけるよう働きかけていく。

## Ⅷ. おわりに

卒業研究のための基礎学習として位置づけられた「研究方法論演習」について、３年生および４年生からの評価によって、卒業研究への動機付けや質的研究に関する内容が不十分であるという、今後の課題が明らかになった。しかし、両学年とも調査票の回収率が低く、学年全体の意見が反映されているとは言い難い。できるだけスムーズに卒業研究に取り組めるよう今後も授業評価を行い、内容・方法ともに検討を重ねていくことが必要である。また今回は本科目の卒業研究への役立ち度を中心に調査したが、看護職の研究的態度は卒後も継続して必要なものであり、今後は卒後も含めた教育効果についても検討が必要と考える。

## 文　献


1）寺﨑明美．卒業論文の留意点．Quality Nursing 1999；5（1）：4-8.

2）濱中喜代．学生の主体性を尊重した研究プロセスの指導．Quality Nursing　1999；5（1）：15-19.

3）木村紀美．卒業論文の指導　研究課題の検討を中心に．Quality Nursing　1999；5（1）：25-33.

4）津本優子，福間美紀，小林裕太．看護学生の卒業研究論文の実態調査－過去5年間の研究内容分析－．島根大学医学部紀要　2007；30：23-33.

5）津本優子，佐藤美紀子，竹田裕子，井上和子，吉野拓未，小林裕太．看護学生の卒業研究論文の実態調査 6-10期生の研究内容分析．島根大学医学部紀要 2013；36：1-12.


（受付　2016年８月22日）